**令和四年　第二十二期くまもと俳句ポスト**

**第二十二期開函**

**俳誌「阿蘇」主宰　　岩岡　中正　選**

**特選**

水鳥の楽園江津湖底透けて　　　　　　　　福岡県宗像市　　　 井上　眞知子

**【講評】**

「水鳥」とは俳句では、鴨などの水上に浮かぶ鳥のことで、冬の季語です。とても平明な（わかりやすい）句で、江津湖を「水鳥の楽園」と、手放しで讃えています。「底透けて」で終るこの句のしらべ（リズム）にも、旅を楽しむ作者の心の弾みが見えます。

**わが輩通り賞**

冬の月古墳に残ると　　　　　　　　　熊本県熊本市　　 　　貴田　雄介

**入選**

菊花展菊池一族出陣す　　　　　　　　　　熊本県熊本市　　　 佐藤　誠吾

田原坂少年兵も見た緑　　　　　　　　　　福岡県福津市　　　 楠　すなを

小春日や我が右腕は母の杖　　　　　　　　熊本県八代市　　　　 清水　明美

**佳作**

空堀のそこらここらで虫の声　　　 　 　　福岡県福岡市　　　　 栗下　純也

野路の秋吾が後ろより影来る　　　　　　　熊本県熊本市　　　　 鶴田　信吾

猫の守る漱石句碑や冬うらら　　　　　　　長崎県諫早市　　　　 篠崎　清明

の故郷の山河柿赤し　　　　　　　　 熊本県熊本市 山﨑　綾子

電停にハーンの鞄そぞろ寒　　　　　　　　神奈川県横浜市　　　 武田　かつら

せんこうの花火できょうそうまけないぞ　　熊本県熊本市　　　　 村上　恵麻

紅葉の闇を彩る刑部邸　　　　　　　　　　熊本県熊本市　　　　 坂口　美穂子

炎天の成趣園に楠一本　　　　　　　　　　石川県金沢市　　　　 辻　佑樹

風鈴や足ぶらぶらと縁側に　　　　　　　　熊本県熊本市　　　　 矢野　友子

則天去私てふ墨黒々と漱石忌　　　　　　　長崎県上戸町　　　　 吉田　志津子

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 投句総数　　百三十五句

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 市内　　　　六十一句

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 市外　　　　七十四句

開函日　令和四年十二月三十一日